

# つなぎびと

TSUNAGI-BITO

早春号

2019年2月18日(月)

フリーペーパー

編集：一般社団法人「檸檬新報舎」(れもんしんぱうしゃ) 発行：大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所

## □ 個々の長欠日数の変化 (関西のある小学校)

|       | 2016 年度  | 2017 年度 |
|-------|----------|---------|
| 6 年男児 | 欠席 105 日 | 欠席 2 日  |
| 2 年男児 | 欠席 92 日  | 欠席 3 日  |
| 5 年男児 | 欠席 46 日  | 欠席 13 日 |
| 4 年女児 | 欠席 191 日 | 欠席 98 日 |
| 4 年男児 | 出席 26 日  | 出席 48 日 |

## □ 連続 7 日の 長欠報告書の数

2016 年度…年間 92 枚  
(1 か月あたり 8.36 枚)



2017 年度…年間 30 枚  
(1 か月あたり 2.73 枚)



山野則子教授

# 長欠児童が激減

スクリーニングを活用した「チーム学校」の取り組みで

関西のある小学校で、1 年間に 30 日以上学校を休む「長期欠席児童」が 2016 年度の 19 人から 2017 年度は 10 人に減った。連続 7 日間休んだ場合に作成する「長欠報告書」も、年間 92 枚から 30 枚に減った…こんな「チーム学校」での活動成果が、文科省に伝えられた。大阪府立大学スクールソーシャルワーク (SSW) 評価支援研究所の山野則子所長(写真)は、「不登校の解決だけでなく、不登校になる前に対応する予防の手だてとしても、『チーム学校』が極めて有用であることを実証したグッドプラクティス (好事例) ではないか」と総括している。  
(「檸檬新報」編集長 平田篤州)

上の表は、この小学校の「チーム学校」の活動をサポートしてきた山野さんがまとめた「個々の児童のケース」を示したものだ。

2016 年度に 105 日間欠席した小学 6 年の男児は、2017 年度にわずか 2 日間の欠席だった。同じく 92 日間欠席した小学 2 年の男児は、3 日に激減した。1 年間に 26 日しか出席できなかった小学 4 年生の男児は、48 日間出席できた。

欠席日数を減らせたのは、教職員、SSW、SC (スクールカウンセラー) から児童に関わる全員が「チーム学校」をつくって課題を共有し、横ぐしを刺して対応したからだった。この小学校は 1 学年 3、4 学級で、児童数は約 650 人。2017 年度に SC と SSW が配置され、「チーム学校」のメンバーは、SSW 評価支援研究所が考案したスクリーニングシートやケース会議の手法を取り入れて活用してきた。

スクリーニング会議のメリットの第一は、教員同士で子どもの様子について話し合うことから主体的かつ内発的

な議論が展開され、個人では見えなかった子どもの姿への気づきや発見が促されることだ。

たとえば、子どもたちの様子について、次のような会話が出る。

「お母さんにいつもいいところを見せようとするから、学校ではしんどそう」「髪を束ねているかどうかで、母親が不在かどうかを見分けられるなんてすごいな」「具のないそうめんばかり食べているという子、こんな話、こんな場がないと言わなかった」…どれも「生活の視点」からの情報であり、アセスメントにつながる豊かなディスカッションになっている。

こんな簡単なことと思うような気になることを「伝える場」を作ることも、意義がある。これが、さまざまな予防に繋がるのだ。

## 2018 年度も減少の見通し

ある教諭は、「今年 3 月末にまとまる 2018 年度の長欠児童も、17 年度と同じ水準に減りそうだ」と話している。

☆「つなぎびと」は、生命保険協会大阪府協会のみなさまの浄財で発行しました。

2 面にチーム学校の取り組み概要

## 1面から

## 不登校ゼロを目指して

## 1 情報収集と整理による「見える化」

## □ 欠席・遅刻情報の「見える化」

欠席や遅刻が目立ったり、不登校経験があったりする児童の遅刻や欠席状況を出席簿から月ごとに集計。「見える化」することで「遅刻が続いている」「欠席が増え始めた」などの不登校の初期の兆しを見つけやすくする。欠席が続く場合には「欠席3日で家庭訪問」を合言葉に、病欠などで欠席連絡がある場合でも家庭訪問を行い、休みがちになる初期を逃さない。

## □ 本人の環境・支援状況の「見える化」

本人の様子、周囲を取り巻く環境、関係機関からの支援状況など、各所に散らばった情報をA4一枚の紙にマップとしてまとめ、併せて必要な情報をメモしておく。児童に関する情報を一覧しながら、共通理解の上に話ができるようにしておく。手書きで、どんどん書き足せる形で活用している。

## 2 さまざまな視点からの「見立て」

直接児童へ支援するのは、だれが良いのか（担任・学年・生徒指導・特別支援・SC）、家庭への支援は、だれが良いのか（学校・SSW・福祉）、目標設定や教職員の声かけなどの共通理解について検討していく。

## □ 関係機関の活用

SCやSSW、各関係機関の力を借り、チーム学校としてさまざまな視点から多角的に「見立て」を行い、支援につ

なげていく。

## 3 児童は全員、全職員でみていく

学校の決まり・生徒指導の方針・いじめ防止基本方針・学習規律などについて細部まで確認しておき、学級開きをする前に、年度の初めから全職員が同じ指導をできるようにしていく。始業式前に実施する。

## □ 生徒指導部会での情報共有

不登校や問題行動、各学年の状況や気づいたことを報告し合い、全教職員が同じ目線で同じ指導ができるようにする。部会で出た内容は、生徒指導日よりして教職員に配布し、情報共有を深めていく。

## 4 積極的児童理解へ

不登校・問題行動などは事後対応を行うだけでなく、未然防止の観点から児童理解を深めていくことが大切である。心のSOSを発信し始めた段階で、早期発見・早期解決につなげていく。そのために経験や勘を補足してくれるツールを活用していく。

## □ スクリーニングリスト（8面右下の図を参照）の実施

学習面、発達面、学校適応、問題行動、周囲の環境について17項目のチェックリストから、学期に一度、全児童から支援の必要な児童を全教員で洗い出す。どこに注目して児童を見ていくべきなのか、若手教職員の育成にもつながる。

## □ スクリーニング会議のメリット

「新たな気づきと発見の促進」（1面参照）のほかに、「複数メンバーで検討する場の提供」が、メリットとしてあげられる。

担任やシートの入力を担当している教員だけの視点だけではなく、他教員からの視点も含めて状況の検討が出来る。複数の視点が入ることで、潜在的問題への気づきやその促し、問題の兆候の発見につながる。

「客観的データの蓄積と連携」もメリットだ。

シートが客観的データ（ツール）として共有され、次につなげていくことができる。シートがあることで話合いのポイントが明確になり、互いに助言し合う関係が出来るので、教員のチーム力がアップする。

## □ 情報共有を深める「児童理解タイム」

職員会議後の約10分間、児童理解を学年団で深める。アセスとスクリーニングリストから出てきた支援を要する児童について情報交換し、学年団で指導・対応できるようにする。そのうえで、情報を生徒指導部会や特別支援推進委員会へつなげていく。

## 5 あたたかい学級・学校づくり

## □ ファミリー活動（たてわり活動）の取り組み

全学年の入った8～10人で班編成した異学年交流を行う。フェスティバルでいっしょにお店を回ったり、児童集会で一緒に並んでゲームをしたり、そうじをしたりする。年10数回の異学年交流の中で、児童はそれぞれの学年に応じた役割、責任感や優しさなどを学び、自己有用感につなげている。

## 評価の本質に迫る講座になった

曇り空の1月16日夕、大阪・弁天町の大阪市教育センターで、講演を終えたばかりの山野則子さんを訪ねた。昨年暮れに大阪府立大学で行われたSSWにかかわる評価ファシリテータ養成講座が画期的なものになった、との評判を聞いていたからだ。日に日に重要になっているSSWの質の向上。一体、どんな講座だったのか。山野さんに聞いた。(檸檬新報取材班)

### — どんな方が参加されたのですか。

「全国のSSWや教育委員会のみなさん約50人が参加されました。講座のテーマは『効果的なスクールソーシャルワーク(SSW)事業プログラム・ファシリテータ養成講座』。昨年12月22日と23日に行いましたが『1日で帰らず、2日目も参加してよかった』という声が聞け、手ごたえを感じました」

### — 「効果的なSSW事業プログラム」は、SSW評価支援研究所が開発したものです。どんな手順で開発されたのですか。

「SSWの全国レベルでの先進例や注目度の高い例について2010年から実践家にインタビューを行い、効果的な援助要素を抽出しました。それに基づいて全国の自治体へアンケートを実施。その結果に関する議論を実践家とともに繰り返しながら、開発してきたものです」

### — 課題ごとにチェックできるマニュアルを作成、Web化したのですね。

「マニュアルの活用ができて、よりよいSSWの実践の構築と発展につなが



全員参加で評価して、実践の価値を見出した。  
(2018年12月、大阪・堺市の大阪府立大学)

るように『プログラム評価』を繰り返します。その場が、ワークショップです。その時に大切なのが、SSWや教育委員会のスタッフが『評価される側』と『評価する側』に分かれずに参加者全員が協働で評価を行い、新たな効果的実践やエンパワメントを生み出すようにファシリテートすることです」

### — 「参加型評価」といわれている手法ですね。

「はい。ここでのファシリテータの役割は、参加者の①主体的参加の促進②実践における価値の創出③意見の再形成つまり、参加者同士の意見交換を促し、実践への新たな気づきを経て、障壁を越える改善策が生み出されるように、参加者をリードしていくことです」

### — 技術を教えるのではなく、評価の過程で「価値」を生み出す講座。そんな理想の講座が初めて実現した、ということですか

「2年前にも開いたのですが、その時は今回のようにはできなかった。チェックボックスでチェックして数値化し

ていくだけではなく、その結果を料理することがSSWの本質です。今回は、こういうことは大事だね、と、他愛もない事象についてもしっかり議論でき、自分の行動に意味付けできる、価値を見出せるワークショップになった…そんなプロセスの研修ができたところは、ないのではないのでしょうか」

### — 「評価支援研究所」の「支援」の意味も、そこにある。

「その通りです。私たちのプログラムは、『数字だけチェックして何がわかるの』、と誤解されたり、けげんされたりしてきました。上から目線で評価されるだけではないか、と。それを払しょくするために企画した講座でもあります。ファシリテータは、グループワークを促進する人、会話ができるように、深く洞察できるように促す人です。内的な、内側からくるような議論を導き、自分の行動に意味付けとか、価値を見出す。評価支援研究所の『評価支援』というネーミングも、まさに、『本質に迫る評価ができるように支援する』という意味なのです」



## 基調講演 山野則子

## 「いま！大阪のこどもたちは…」

しなやかな  
強さ

2018年11月7日の昼下がり。大阪市港区の八幡屋公園にある丸善インテックアリーナ大阪（大阪市中央体育館）。錦秋の木々に囲まれる中で、「こども支援からはじまる地域の居場所づくり」をテーマにしたシンポジウムが行われた。

主催したのは、大阪市社会福祉協議会と大阪市ボランティア・市民活動センター。最初に、大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類教授、山野則子さんが、基調講演した。タイトルは、「いま！大阪のこどもたちは…」。

満席の150人を超える人々が聴き入った。  
（「檸檬新報」編集長 平田篤州）

## □ 見えにくい貧困

「2016年に、私の研究室が大阪府や大阪市などから『子どもの生活に関する実態調査』の委託を受けました。きょうは、その調査結果を踏まえて、私たちに何が必要かを考えます」

基調講演では、「実態調査」の結果に入る前に、山野さんはまず、「貧困」の概念についてふれた。

「貧困と言ったら、お金がないということだけを考えますか。みなさんに質問します。いまから挙げる中で、子どもにとって絶対必要なものと思った場合は、手を挙げてください」

山野さんは、次の4項目を挙げてたずねた。その結果は…。

## ① 毎日の晩御飯

→ほぼ全員が挙手

## ② 自転車

→10% ぐらいの人が挙手

## ③ 誕生日のプレゼント

→80% ぐらいの人が挙手

## ④ 家族でお出かけする

→多くの人が挙手

「イギリスの国民世論調査では、4つとも必需品という答えになりました。日本では、2010年のころには、①の『毎日のご飯』だけが絶対必要という答えでした。理解が進んで、きょうは違いますね。さて、イギリスと日本、どちらのほうが暮らしやすいですか。子どもに温かいですか」

こう話した後、10% ぐらいしか手が挙がらなかった「自転車が子どもにとってなぜ、必需品なのか」について話した。

「自転車を持っていない小学4年生を考えます。友達から放課後、『公園に4時半集合ね』と声をかけられたとします。小学生は子どもだけでは原則、校区の外に出てはいけないことになっていますが、4年生という年ごろは、ちょっと悪いこともしたくなる、徒党を組む時代。ソーシャルキャピタル（人とのつながり）ですね。でも、この4年生は『ぼくのうちには自転車がない』とは言えなくて、公園に行かなかった。そうすると、『あいつは付き合いの悪いやつや』となり友達と距離ができて、仲間外れになって、学校に行かなくなる…」

## □ 恥の文化

なぜ、「自転車がない」と言えない

のか。そこに山野さんは、日本の「恥の文化」を見る思いがするという。

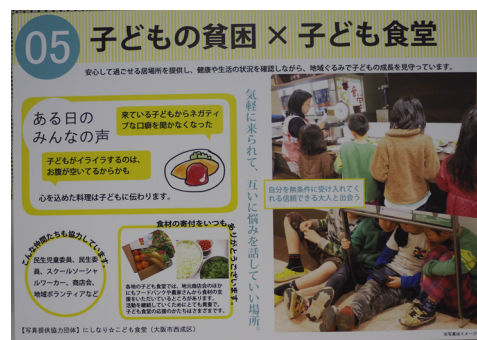
「ここが日本の問題です。恥の文化。自転車がないという、『貧困』というレッテルをはられる。スティグマ（レッテル貼り）です。イギリスでは、貧困であることはある種、サービスを受ける権利なのですが、日本では『恥』となる。だまって公園に行かないことから始まって、ヒューマンキャピタルという人間の力、つまり学力や健康にまで影響していきます」

不登校とされる子どもたちの中には、そもそも、どうして学校に行けなくなったのか、そのことをはっきり言えない子どもがいる。

「自分の意思で、自己決定で学校を休むのではなくて、スティグマや環境によって行けなくなる…自己決定ではない不登校があるのです。そのようになることを防ぐ、それが重要です」

## □ 貧困の定義

貧困の定義について、改めて振り返る。よく言われるのが「絶対的貧困」と「相対的貧困」。「絶対的貧困」は、食べ物がない、家がないなど人間とし



シンポジウムの会場に掲げられた「子ども食堂と貧困」のパネル（2018年11月7日）

での最低限の命に係わるような貧困のことだ。病気や飢餓に苦しむアフリカの子どもたちの現実は、その例だ。

一方で、「相対的貧困」は、その国の文化や生活の一般的な水準では暮らせない、困窮した状態をいう。日本では、「世帯の可処分所得（手取り総額）が、その国の全世帯の所得の中央値の半分（貧困ライン）に満たない状態」としている。具体的に見る。

2015年度の日本の1世帯あたりの可処分所得の中央値は、年約245万円。その半分の約122万円が「貧困ライン」といわれ、それ以下で生活している世帯が「相対的貧困」とされる。月額だと約10万2000円。当てはまる人が2015年時点で、15.6%いた。

山野さんが話した「自転車を買えない家。そのことを話せない子ども」は、「相対的貧困」の家庭の例示だった。

2017年6月27日に発表された国民生活基礎調査では、家族の数によって、次のような状態が「相対的貧困」とされた。

**< 可処分所得が単身世帯で年間約122万円未満、2人世帯で約173万円未満、3人世帯で約211万円未満、4人世帯で約244万円未満 >**

今、日本の子どもたちの「7人に1人」が、相対的貧困の中で暮らしている、と指摘されている。

## □ 中央値以下の困窮度も調査

実態調査は、2016年6月27日から7月14日の間に実施した。

主な調査内容は、①物的資源や生活に必要な資源の欠如（現金やサービス、住宅、医療を含む）②ヒューマンキャピタル（教育レベル、自分の力を労働力に転換する能力など）の欠如③ソーシャルキャピタル（つながり、近隣、友人との関係性）の欠如—の3点。

小学5年と中学2年の全児童・生

徒とその保護者▽認定こども園、幼稚園、保育所の全5歳児の保護者—に調査票を配った。

「回答のあった約10万件について集計・分析しました。このうち、大阪市は約7万件。大阪市の中央値は238万円で、全国値（245万円）より低い状態でした。貧困ラインはざっと120万円ですが、120万円以下でなくても、中央値の238万円以下の人にはしんどいのではないか…そんな思いから、中央値以下のすべての人の困窮状態を調べました」

中央値の238万円の50%以下（119万円以下）の人を困窮度1（相対的貧困）、60%（約143万円）から50%（119万円）までの人を困窮度2、100%（238万円）から60%（約143万円）までの人を困窮度3として、分析していった。



大阪ユニセフ協会のボランティア学生らが制作したパネル。大阪市の子どもたちの学力の現状をまとめた。（2019年1月26日、大阪市北区）

## □ 就学支援制度の告知不十分

「小5、中2の困窮度1の世帯では、正規雇用は32・4%。困窮度1の半数は母子世帯。困窮度1の世帯で貯蓄をしているのは4分の1どまり。これでは、明らかに生活がしんどくなります」



講演で話す山野則子教授（2018年11月7日）

「特に気になったのは、困窮度1なのに就学援助を受けたことがないという人が、13.4%もあったことです」

山野さんは、就学援助制度についてふれた。学校教育法第19条は、「経済的理由によって、就学困難と認められる学齢児童生徒の保護者に対しては、市町村は必要な援助を与えなければならない」と定めている。この条文に基づいて市町村は、学用品費▽体育実技用具費▽通学費▽医療費▽給食費▽生徒会費▽PTA会費▽修学旅行費などを援助している。

「就学援助については、学校でもプリントを配布していて、一番（周知されている）申請しやすい、受けやすい制度だと思うのですが…。ちょっとした行動で助けられる制度があるという事実が、届いていない。行政は申請主義なので、未払いの人は『借金取り』として追いかけますが、未受給の人には『あなたには受給する権利がある』といった追いかけてない。どこに困っている人がいるのかわからない状態になっているのです」







## □ 児童扶養手当の告知も不十分

次に、児童扶養手当についても指摘した。

「児童扶養手当も、困窮度1の母子家庭のうち9・4%が受けたことがない、という回答でした」

児童扶養手当は、離婚などによって父又は母の一方からしか養育を受けられない1人親家庭などの児童のために、地方自治体から支給される支援金だ。児童扶養手当法に基づいて児童1人の場合、月額4万2000円—などと決められている。

「(みなさんのような) 支援する人々がこのような実態を知ってくださって、当事者だけをターゲットにするような言い方はしないで、失礼に思われるかもしれませんので…一般的に『こんな制度がありますよ』とチラシを貼るとか、目に留まるような工夫があってもいいのかな、と思います。行政では追いかけていけないところを、どうやってアウトリーチしていくか(地域でカバーするか)。そのことも、問わ

れています」

## □ 学力、進路に影響

就学支援や児童扶養手当がきちんと行き届いていないことは、学力にも影響していく、という。

「ふつうは勉強時間が長くなればなるほど、学力がつきます。ところが、調査では、年239万円の中央値以上ではその通りとわかったのですが、中央値以下では、明確な成果は読み取れませんでした」

やればやるほど勉強ができるというのは、中央値以上のことだけなんだ。学力とは、個人の努力だけで培われるものではない…そんなことが浮き彫りになった、というのだ。

「おうちに本がないとか、勇気づけてくれる親子の会話や地域の大人とのかわりなどがなくかが関係していそう…ここも、支援するみなさんに知っていただけたらと思いました」

そして、子どもたちの進路希望にも困窮度の影響が表れている。

「中卒や高卒でいいと思っている人は、年122万円以下の困窮度1にな

ると中央値以上の倍以上になっていました。もちろん、中卒や高卒が悪いといっているわけではありません。困窮度1の子どもたちに、進路の選択肢がたくさんあって、その中で進路を選んでいるのか、という点が心配なのです」他市でのヒアリング調査で、家庭に本がない。学校と家の往復だけで、アドバイスしてくれる大人や友達などの『他との関係』がつかれない。会話がでない。後押しがない。支援がない。そんなことが、進路希望に影響している、という結果が出たという。

「今回の調査でも、おうちの人以外の大人とのかかわりは、困窮度が増すほど、どんどん下がっていました。親が子どもを地域や社会に連れ出す余裕がない。少年サッカーでも少年野球でも、親がついていきますよね。そんな機会がない。そんなことも、進路の決定に関係しているのではないかと思います」

## □ 健康にも影響

さらに、困窮度が子どもや親の健康にも影響していると指摘した。

「身体がかゆくなる。痛くなる。やる気が起きない。イライラする…こんな子どもたちの状況は、困窮度が高くなればなるほど高くなっています。このあたりが非常に気になるところです。そしてこのことは親の(調査結果の) ほうが、よりきれいにれているかもしれません。イライラしたり、腰が痛くなったり…。そんな中で暮らしている親子は、ある方が言ったのですが、ほんとに家で空気がびんぴんしている。お母さんが別に冷たいわけでもないし、きついわけでもないけれど、子どもは気を使って子ども食堂に行きたい、といえない。自転車買ってと言えないのです。さきほども話しましたが、小学生は、子どもだけでは校区外に出



森で遊ぶ子どもたち(大阪府箕面市で)

てはいけないことになっています。ということを見ると、子ども食堂などみなさまの支援活動は、1校区に1つないと、本当の意味で届かないことになります。私はすごく胸が痛みます。みなさまの活動は素晴らしいと思っていますが、自分の校区をまたがっていかないと届かない。足りへんのです。ですから、みなさんの地域の力をこれからどうやって広げていってもらったらいいか、ということも感じます」

## □ 行政の手が届いていない

山野さんは、貧困や孤立が虐待につながりやすいこと、問題行動に走って学力の低下をまねくことなどを指摘したうえ、行政（児童福祉）の手が子どもたちに届いていない実態を話した。

「大阪市の就学援助率は、30% 近いですね。この30% 近い子どもたちは、問題を抱えているかもしれない。でも、児童相談、児童福祉（行政）がかかわっているのは、全校生徒の1% ぐらいなんです。区の中で把握しているのも10% から15%。就学援助を受けている30% 近い子どもたちに、福祉の支援はきちんと対応できていないことになります。見えないところに、逆境を抱えている子どもたちがいる。地域の活動でもわかりにくい。よく来ている子どもたちには『しんどいんじゃないか』と声掛けをするなど、いろんなアプローチで子どもの状態もわかりますが、それでも見えない子どもたちがいます。個人情報のこともあるし、わかるすべもない。でも、行政の課題としたら、すべての子どもたちに支援を届ける工夫がないといけません。とりこぼしていく子どもがあることになります。だから、すべての子が行く学校の間が支援の拠点のひとつになることが重要なのです」

## □ レジリエンス

そして、出席しているみなさんに、「レジリエンス」(Resilience)という言葉を紹介して話を進めた。

「逆境にある子どもたちの状況に本人が作用する力、『レジリエンス』という概念があります」

「レジリエンス」について、配布資料には次のように書かれていた。

＜心理的、社会的、文化的、身体的、物質的資源が本人に作用する方向性を探し求め調整し利用する能力（秋山2012）＞

もともと物理学や生態学の用語として使われ、近年は心理学の分野で「復元力」「弾力性」などと訳されていたが、その力は決して個人の持って生まれたものに限らない。周りの人々ができるだけ本人が資源を調整したり利用したりできるよう提供することで培われるのだ。簡潔に言うと「しなやかな強さ」「跳ね返す力」などの意味で使われる。

山野さんは続けた。

「みなさんの活動も、レジリエンスを高める取り組みになっています。虐待問題は、地域ではできません。役割が違いますよね。でも、いろんな逆境を抱えている子どもたちの『調整する力』を高めていってくださっています。うまく乗り越えていける力を、子どもたちがつけていける、逆境の環境にレジリエンスの効果を与えて下さっていると強く思っています」

## □ 学校プラットフォーム

話は「学校プラットフォーム」へ。

「日本の小中学校ではスタッフの82%が教師ですが、アメリカでは56%、イギリスでは51%です。学校イコール教師ではない。SSWやSCが入ったり、司書や医療及び看護職員、メンター（精神的サポートをする助言

待望の新刊!!



『学校プラットフォーム』  
山野則子著  
(有斐閣刊、定価・本体 2600 円 + 税)

者・指導者) など教員以外の専門スタッフが半分をしめています」

欧米の学校のイメージは、日本と全く違う。様々な専門職が入り、連絡を密にしながら子どもたちを支えている。「学校」が子どもたちを支援する「プラットフォーム（拠点、居場所）」になっている、というわけだ。

実は山野さんは、基調講演の冒頭で「学校プラットフォーム」にふれていた。「文科省の『子ども貧困対策会議』の検討の中で、『学校プラットフォーム』という言葉が出てきました。放課後になったら、どこにも行けない子どもがいます。だから、学校が子どもたちを支援するプラットフォームになって、子ども支援の選択肢を広げていく」

日本では保健所の乳幼児健診で、小学校入学までは、子どもたちの状況が「全数把握」できる。気になる子どもはすべて発見され、どこかにつながっていく。ところが、就学後に全数把握できる仕組みは、ぴたっとなくなる。山野さんは、それができる可能性があるのが学校だ、と強調する。

「選挙になると（投票所になった）学校に行く。困ったことが起きると、学校に相談する…みなさんにとって学校は、身近なものですよね。そこをプラットフォームにして、子どもたちを全数把握できるようにする。義務教育という



## 8 シンポジウム「こども支援からはじまる地域の居場所づくり」

ことは、そこでちゃんとリファアー（問題解決のために適切な専門家や機関を紹介）されたり、大丈夫かをチェックされたりする仕組みを持っているということです。そんな仕組みを創ろうと、悪戦苦闘しています」

そして、こう続けた。

「学校が（子ども支援の拠点として）すべてとは、思っていません。でも、もし学校に子ども食堂があったら。みなさんの地域の活動が、学校とつながってあれば、家に帰ってしまったらどこにも行けない子どもが救えるかもしれない。ぜひ学校との連携ができればうれしいな、と思っています」

### □ チーム学校

続いて「チーム学校」の話へ。2015年に神奈川県川崎市で起きた少年事件を例にとって、文科省の中央教育審議会で論議された「チーム学校」の必要性を説いた。

川崎で起きたのは、ある中学生が非行少年のグループにリンチされ、川に投げ捨てられて命を奪われてしまった以下の事件だ。

《少年は1学期、2学期は毎日、学校に行っていた。1月8日から学校に行かなくなって、2月20日に亡くなった。先生は、学校に来ている時は元気だし、学校側は「不登校」と思っていた。少年の自宅を訪ねても、あえなかった。あとでわかったことだが、母子家庭で、晩御飯も作っていなかった。生活保護を申請中で、島根県から引っ越してきて、少年も母親も孤立していた。少年は放課後、児童館に行っていたが、夜になると閉館する。少年はだんだん、はみだされてしまって、行く場所がなくなってゲームセンターへ。そこで非行少年とつながってしまって、巻き込まれていった》

「私は大阪府のスクールソーシャルワーカー (SSW) のスーパーバイザーをしています、川崎事件の中学生のような例は、数知れずあります。ただ、死には至っていない。大阪のネットワークの強さですね」

川崎事件でも、あの当時、関係者はみんな「何かある」と気づいていたという。だが、「あの子は大丈夫かな」と、1歩踏み込まなかった。地域担当の先生、不登校担当の先生だけじゃなくて、生活保護の事務職の人、非行少年とつながっていた生徒指導の先生…みんな情報はないことはなかったが、情報を横串にさして、ひとつにはなっていなかった。

「もし、それができていたら、事件は防げたはず。先生がひとりで抱えてしまわないで、いろんなスタッフがチームを組む、学校でチームを組まない…。なので、地域で活動するみなさんとの連携も極めて大事なのです」

山野さんは、大阪市の子どもサポート事業にもかかわってきた。その中の、スクリーニングリストを活用する取り組みについて話した。

「SSW や担任、生徒指導の先生、保健室の先生などが『チーム』を組み、全数（すべての子どもたち）調査をして、子どもたちの気になる項目、今日お見せした遅刻だとか。気になる項目を拾いあげて、いろんな横串を刺して、ピックアップして、スクリーニングリストをつくる…そこから児童相談所とか専門家につなげたり、子ども食堂などの地域の取り組みにつなげたり、学校で見守っていく。そして、取り組みの評価も行。今、大阪시가やろうとしているところです」

最後に、ある他市の小学校の事例をあげた。

「就学援助率が半数ぐらいのところなんです、社会福祉協議会のスタッフがSSWに相談して、自治会長に話

を持っていき、学校の中で子ども食堂を始めました。子どもたちの利用状況は、学校の中なので、すぐに把握できます。先生たちも、子どもたちの変化に気づきやすい。学校は地域に信頼があるので、地域のお店が歯ブラシを寄付したり、近所の歯医者さんが歯のチェックをしてくれたり。父母の皆さんも『ランドセルかけ』をつくってくれたり。いくたびに、どんどん進化している。まさに地域力。感動です。遅刻がゼロになりました。朝ごはんを食べたら、勉強にむかえるのです。就学援助率が半数の地域といいましたが、まさにターゲットの子が来ている。半数の子が来ているのです。そんな効果が、学校プラットホームです」

実態調査報告書のまとめには、「誰もが通う場所（学校）での支援展開を検討することが重要である」という締めくくりで、次のように書かれていた。

### まとめ

子どもの学力や健康が、家庭の大人と過ごす生活とも密接に関係する。困窮度が高いほど、保護者にとって心身ともにマイナスに作用している。保護者と子どもがともに前向きに肯定的な自分づくりができる家庭教育支援（親支援プログラムの導入）を積極的に展開すること、多様な体験ができるように誰もが通う場所（学校）での支援展開を検討することが重要である。



スクリーニング会議など「チーム学校」の取り組みを説明したページ（山野さんの著書『学校プラットホーム』から）



## 対談



## 山野則子さん

大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類教授

## 上野谷加代子さん

同志社大学社会学部 教授

大阪市ボランティア・市民活動センター所長



「こども支援からはじまる地域の居場所づくり」のシンポジウム。

最後のプログラムは、山野則子さんと、主催者側である大阪市ボランティア・市民活動センターの所長でもある上野谷加代子さんの対談だ。

最初に基調講演した山野さん。2 番目のプログラムだった「地域こども支援の活動報告」の進行役をつとめた上野谷さん。日本の福祉をリードする学者であり、実践者である 2 人の対談は、「貧困」のキーワードから、始まった。(編集委員 武田和代)

## お知らせ

「地域こども支援の活動報告」は、檸檬新報第 7 号の 4、5、6 面に掲載しています。

## □ 貧困というレッテル

**上野谷** 「子ども食堂」は、貧困の子どもを集めるイメージがあって嫌だ、という意見がありますが、どのようにお考えですか。

**山野** 「貧困だったらかわいそう」という思いから、子ども食堂の看板を上げたくない。もしそう思っておられるのなら、貧困に対する偏見があるのではと思います。イギリスだったら、「貧困は、当たり前前にサービスを受ける権利がある状態」ととらえます。「(イギリス人に) なぜ日本人は貧困マップ(貧しい人々が暮らす地域の地図)を作るのにスティグマ(烙印)のことを気に掛けるのですか」と聞かれます。(貧困は) 他のこと、例えば、捻挫していることと同じように当たり前のことなのです。たまたま今、経済的にしんどい状況にあるだけのこと、なのですが…」

**上野谷** そうですね。

**山野** (日々の仕事をしていると) いつも、恥の文化、学校文化と闘っている気がします。貧困イコール恥ずかし

いという文化が蔓延しているからで、そこを考えないといけない。子ども食堂は、貧困の子だけを集めるのではない、いろんな子どもたちにサービスを提供する…ということはよくわかります。でも、大阪の実態(貧困に苦しむ子どもの現実)から、目をそらさないことも重要だと思います。

**上野谷** 少し学術的に話しますと、貧困の概念は、6つの自立ができていない状態をいいます。1 番目は、自立を保証する経済的自立。2 つ目は、精神的・文化的自立。お祭りや地域の行事に行ったり、おはよう運動(あいさつの励行)や、きれいな花を植えたりするのは、精神的・文化的自立。それができなければ「自立できていない」ということです。3 つ目には、人間関係の自立。ごはん食べたら「おいしいねえ」「ごちそうさま」と言えるのは自立ができていない 1 つのプロセス。子ども食堂でモクモク食べてみんなで遊んだから自立できてよかったというのは、まだ半分です。(4 番目、5 番目には) 生活的・技術的自立もある。お米を研いでごはん作ろうから始まって、でき

たら縫物もして、靴も磨いて、洗濯して。そういった意味の自立もある。貧困の概念は、とても広いのです。

**山野** そうですね。

**上野谷** 貧困というとお金に偏ってしまいますが、文化面でも子どもたちは貧困になっているのです。私も電球が代えられないし、生活技術的に自立ができていない貧困です。生活で言うと、ド貧困になっているので、みんな教え合おうと(笑)。貧困といっぴくびくしたらあかん。子どもを排除しない、特別視しない方向で子ども食堂を運営していくことが大事です。

## □ レジリエンス(Resilience)

**上野谷** 山野先生の基調講演にあった「レジリエンス」についてですが、貧困から回復していく、弱みを強みに変えていく過程のために、子ども食堂は非常に効果的だと思います。

**山野** そうですね。レジリエンスの発達を促す要素には、「安定性」「負荷バランス」「参加」の 3 つがあります。「安定性」というのは、例えば親や身近な



上野谷加代子（うえのやかよこ）

同志社大学社会学部教授。大阪市ボランティア・市民活動センター所長。研究テーマは地域福祉、地域を基盤としたソーシャルワークの展開方法（論）と教育方法。日本福祉教育・ボランティア学習学会会長、日本地域福祉学会会長などを歴任。モットーは「清く、正しく、美しく、そして朗らかに」。

大人と「支持的な関係」（失敗や間違いが気持ちよく受け入れられる、居心地が良い環境）を作ること。強みをひっぱり出してくれたり、後押ししてくれたり、「すごいね」と言ってくれたり。対話の中で、子どもは育まれます。

**上野谷** 支持的な関係は、きわめて大切ですね。

**山野** はい。それは、目には見えないものです。声かけは、子どもに百発百中して一発ぐらいしか当たらないかもしれませんが、必ず効果がある。急に変わるわけではありませんが、支持的な関係は相手を変えていきます。

**上野谷** 2つ目の「負荷バランス」。自分が抱え込む、自分自身に負荷をかけすぎないように、バランスを考えるといいですね。

**山野** はい。たとえば、1人でいる時間を減らす、居場所を作ることなどです。大阪市はいろんな場所で選択肢を作ってくれています。そうすると、学校が嫌な子は、そこにいけばいい。1人でいる時間を減らす。1番は、だれかと一緒にご飯を食べることです。

経済的貧困の子どもだけでなく、朝ごはんを食べていない子どもはとて多く、しんどい状況だと思います。

**上野谷** 3つ目の「参加」は。

**山野** 居場所の中で、子どもが貢献することです。子どもが社会に貢献するという体験は、すごく重要です。児童相談で虐待事例のお母さんの成功は、貢献した感じを持てたかということ。母親がいつも支援を受けるだけではない。被支援者が半分以上、支援者になっていくという素晴らしい話もあります。居場所の中で、子どもが役割をもって貢献していく体験をどう積んでもらうかが大事なのです。各方面で、レジリエンスを発達させる場所を環境として用意していく。今日お集まりの地域のみなさんは、子どもが環境に適應できる力をつけられるように、それぞれの活動によって助けていらっしゃる。ただ見えないので苦しいこともあります。みなさんのお話を聞いて、すごいなと思いました。

**上野谷** 子ども自身が元気になっていく、子どもを通して大人も元気になっていく…相互の関係性ですね。子ども食堂は、エネルギーを持っています。私もかかわっている「滋賀県社会福祉協議会 滋賀の縁創造実践センター」は、老いも若きもという子ども食堂を営んでいます。民家を借りて、毎日「食」を提供しています。だれが来てもいい。その中に、学校には行っていないけど教室に入っていけない3人兄弟がいます。その家庭では、お父さんが1人で育てています。生活保護は受けたくなくて受けていません。お父さんは日給の仕事なので、お金があるときはいいのですが…。子どもたちは、給食も食べません。教室に入るのが嫌だから。子ども食堂で1日1食で過ごしています。

**山野** そうですか。

**上野谷** でも、子どもさんは学生と波長が合います。学生にはバイバイと手を振るのに、私のように「さようなら」と言うと嫌がります。これはいい反応です。私は、社会的には「さようなら」というものだと思って言い続けているわけですが、「バイバイ」という人もいます。それがいい。全員が、「さようなら」「ご機嫌よう」というわけではないのです。子ども自身も居場所があるというので、救われています。いろんな食堂があるんだと思って。ここはお寺がバックにあり、ありがたい「お下がり」をいただいています。

## □ 教育と福祉

**上野谷** 今お話ししたように、子どもの貧困にはいろんなことがあります。お父さんは高校に行かなくていいという。そうするとその子ども（中学生）は、勉強する気にもなりません。勉強すると成績は上がるのでしたら高校に行かせられるかと、（支援者は）悩んでいます。教育の問題と絡んで、教育委員会、学校の校長先生、先生とのコラボをどう作っていくのかも大事です。山野先生は福祉の学者のなかにあって、唯一、文科省とパイプが強い先生です。どうすれば教育関係者とつながっていけるのか、お話しください。

**山野** みなさん困ったことがあると、なんでも学校ではないですか。不審者がいるといったら、学校に連絡が入って、ケース会議をしている最中でも校長が出ていく。なんでも110番は学校。それを全部引き受けてきたので、学校というのは弱みと強みで両極にあります。一般的に丸抱えするか、分からないといって投げってしまうか。日本の教育は、かなりのことを引き受けてきました。教師でも、学校のせいでもなく、これは日本の教育の歴史の間



題だと思えます。学校や校長、教育委員会に腹を立ててもしょうがありません。学校のしんどさを分かって、そのうえで何ができるか。その時に、主語を何にするかです。

**上野谷** 先生の場合は、どうされていますか。

**山野** (私たちは) 児童福祉の立場なので、子どもの最善の利益をベースに、「子ども」を主語に考えて会話に変えていきます。文科省の委員会でも、教師は教師を主語に、地域関係者は地域を主語に話すので、話がかみ合いません。縦割りで領域が違う時には、主語を何にするのか明確にして話をするのが、大きなポイントです。

**上野谷** 私も改めます。昔から学校が苦手で(笑)。教育分野と福祉分野の人々が、相互に学び合うことが大事なのですが。相互が垣根を低くしないと。教育と福祉では、文化や使う言葉が違うから、ここをどうにかしないと…。

**山野** 全然言葉が違いますよね。伝わっているようで、伝わっていない。スクールソーシャルワーカー(SSW = School Social Worker)は、「通訳する人」ともいわれます。それが分かって、SSWの人々について「使い勝手がいい」という学校もあります。

## □ 学生を獲得する運動

**上野谷** さて、ボランティア活動や市民運動を「文化」にしていくという視点について。生活様式に取り組んでいかなければ、一時的なブームで去っていきます。子ども食堂もしかりで、持続する仕組みを作らなければなりません。持続する仕組みについて、いいお知恵はありませんか。

**山野** 全体と個別を意識して作っていくということと、複数でつくっていく…。世代交代が、ありますよね。現役

のPTAが入ってくる仕組みに、若い世代が入っていくのも持続可能になる1つのポイントでは。

**上野谷** 確かに、学生の力はすごい。各大学の学生さんたちが、今まで以上にボランティアや子ども食堂に参加しています。日本は変わりつつあるかもという気に、やっとなってきました。思い切って、高校生を含め学生に声をかけていく。学校の先生とも手をつながなければなりません、大阪市民として「学生を獲得する運動」をやっていく必要があるかなと思っています。

**山野** 若い人、いいですね。

**上野谷** 文化にするには拠点、足場がある。その意味で、大阪にも社会福祉法人施設がいっぱいありますが、拠点としての可能性をどう思われますか。

**山野** 今日の地域のみなさまの活動報告を聞いて、すごいなと思いました。社会福祉法人施設が仕組みにコミットしているところは、他にはそんなにないのではないのでしょうか。素晴らしいと思います。

**上野谷** 6ヶ所の社会福祉法人施設にお手伝いいただいています。課題はありますが、企業と社会福祉法人と子ども食堂の三角形、それを応援する社会福祉協議会、こういった仕組みがいいですね。まずいことが出たら変えていけばいい。行政は仕組みを作ったなかなか変えませんが、柔軟に変えていく。これが持続可能な発展につながる。居場所の拠点をあちこちに作っていくのが、持続可能な文化にしていくことにつながります。

## □ 「我が事」とする

**上野谷** もう一つは、やっぱり主体化。他人事でなく「私事(わたくしごと)」にするときに文化になっていく。学びや教育の場では(ボランティアや市民

活動を)「我が事」にするというのは、どうでしょうか。

**山野** 地域の方には、リーダーが倒れたら続かないという不安があります。だれかのためにやっているというのなら、続かない。地域の人は子どもの笑顔が見られるので、「私事」(我が事)になる。自分が主語で主体的にかかわっているところは、どんどん繁栄して広がっています。だれかのためにやっている、うまくいかない。やはり、主語がすごく大事。地域の人は子どもの笑顔が見られる、学校は子どもを貧困に打ち勝つように育成する、行政は全体の構造をつくっていく。この3つがうまくかみ合っていくと、持続可能になります。

**上野谷** 3者には、永遠にしゃべり続けるぐらいの対話、度量、心の広さが必要です。最後は、連帯です。日本全体が福祉の思想、他者を助けるという連帯がかなり空洞化、壊れていっています。ここは、踏ん張らないと助け合いどころではない社会になってしまいます。大阪は「おせっかい」のいい文化が残っているので、「今日のおせっかい」に変えていく。子ども食堂を契機に、変えられるのではないかと思います。

**山野** そうですね。

**上野谷** 子どもの顔を見たら、子どものために平和にせなあかんと思います。孫の顔を見たら、この子が大きくなるまではと思います。次の世代が同じように思っていてくれたら、歴史が作られます。子どもに助けられているんです。そこに幸せを感じている。今後も足元を固めながらも、自分たちの考えよりも、少し手を伸ばして、のりしろを出して、のりを張り合って、そののりしろが連帯していく力になるのではないかと思います。本日は、ありがとうございました。

# つなぎびと

TSUNAGI-BITO

発行 大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所  
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1  
TEL 072-254-9783 (山野則子研究室)  
eb-ssw@sw.osakafu-u.ac.jp

編集 一般社団法人「檸檬新報舎」  
〒541-0046 大阪市中央区平野町2丁目2番9号 ビルサライ701  
TEL 06-6226-5596

DTP: 丸井春

## コラム 世界の街角

### タイ・バンコク スラムの天使、 新たな歩みが始まった



その本の巻頭には、次のように書かれている。

〈「スラムの天使」と呼ばれて来たプラティープ・ウンソントム・秦（写真）とその仲間たちの歩みと闘いの記録です〉

本のタイトルは『ドゥアン・プラティープ財団の40年』、約150ページ。「スラムの救済」を目的に1978年8月にタイ・バンコクのスラム街に創設された財団が40周年を迎えた2018年8月に発行された。

実は昨夏、約10万人が暮らすタイ最大のスラム街「クロントイ」にある財団本部で行われた創設40周年の記念式典に参加した。

日本語で表現すると、財団の活動はまさに「社会福祉」だ。

プラティープさんは1952年生まれ

の66歳。クロントイ・スラムに生まれ、4歳のころ、物売りを始めた。7歳で小学校に入学し、卒業後もスラム近くの港に停泊している商船のさび落としなどをして働いた。

15歳の時に中学校夜間部へ。卒業後、教員養成学校に進学した。「教育こそが生きる力、スラムの生活を変える原動力だ」と確信していたからだ。

1968年の16歳のとき、スラムの自宅に「1日1パーツ学校（1パーツ＝約3円）」を開設。貧しい子どもたちの学び舎になった。1978年、26歳の若さでアジアのノーベル賞と呼ばれる「ラモン・マグサイサイ賞」（社会福祉部門）を受賞。賞金2万ドルを原資に、財団を設立した。

財団は、スラムの子どもたち約2000人に学資を援助する一方、農村部の貧しい子どもたちに奨学金を授給する教育里親プログラムを進めた。

麻薬中毒に苦しむ青少年の更生と自立を目指すプロジェクトや、高齢者福祉、芸術振興、無国籍者の国籍取得、エイズ対策などを展開してきた。

闘いの歴史でもあった。スラムの人々の人権擁護やインフラ・環境整備のために、政府とも向き合った。国会議員になって活躍した時期もある。そして今、政府による「スラム街一掃・立ち退き問題」が再燃している。

〈時代の変化はしっかり見定める。でも財団の歩んでいく道は変わりません。無知と貧困と病を余儀なくされている人々を救いたい。私たちは40年間の活動を通じて、よい基盤があれば、良い未来に向かって羽ばたいていける子どもたちの姿を、数えきれないほど目にしてきた…〉

本には、こんな「スラムの天使」の言葉が引用されていた。

（平田篤州）



『ドゥアン・プラティープ財団の40年』の表紙に使われている写真。中央が若いころのプラティープさん。

## NEWS

### 生命保険協会大阪府協会 盲導犬育成事業に助成

一般社団法人「生命保険協会大阪府協会」（徳留隆夫会長）は1月22日、大阪府千早赤阪村の社会福祉法人「日本ライトハウス」（橋本照夫理事長）の盲導犬訓練所で、盲導犬育成事業への助成として150万円を寄贈した。

日本ライトハウスは、目の不自由な方を照らす「陸の灯台」として1922年に点字図書の製作を始めた。1970

年に盲導犬育成事業をスタートし、1994年に千早赤阪村に盲導犬訓練所を開設した。

大阪府協会は1998年から助成を始めて、今回で21回目。訓練所では助成金を原資にして、訓練を受けた成犬をオーストラリア・メルボルンから輸入し、これまでに730頭が卒業、138頭が現役で活躍している。

寄贈された浄財は、大阪府協会が昨年9月に府下の会員各社職員に呼びかけて集めた約650万円の一部。

「つなぎびと」発行への助成について、徳留会長は「今後も、SSWの人材育成や啓蒙活動に少しでもお役に立つことができれば幸いです」と話した。



橋本照夫理事長（左）から感謝状を受け取る徳留隆夫会長（右）。手前はメルボルンから輸入された成犬。訓練所で育成されて「盲導犬」として社会に出る。

☆「つなぎびと」は、生命保険協会大阪府協会のみなさまの浄財で発行しました。